

# 線子霧の

しごせん

## 高樹のぶ子



映画化

全国東映系'96年1月20日一斉公開

中公文庫



中公文庫

霧の子午線

定価はカバーに表示してあります。

1995年11月18日初版

1996年1月25日5版

著者 高樹のぶ子

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1995 CHUOKORON-SHA,INC. / Nobuko Takagi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202463-3 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

# 霧の子午線

中央公論社



目次

霧の子午線

5

西欧的な作風の秀作

長部日出雄

293



# 霧の子午線



鳥飼希代子は腕時計を見た。十時五十分。受話器を取り上げてプッシュボタンを押すと、沢田八重の机の上の電話が、ルルルルと鳴っているのが聞こえた。左手の鉛筆が机の上に繰り返し星印を描いている。

十一時から文化班の会議が始まる。部長もデスクも、書類を掴んで出ていった。

「あ、八重ね、十一時から会議だからゆっくり話してられないんだ。午後は取材で出るし」

「どうしたの」

走ってきて受話器を持ち上げたらしく、息が切れて苦しそうだ。ショートカットの前髪の揺れが見える。

「光夫が、家を出たの」

「出たって」

「ともかく家を出たのよ、今朝」

「だって、学校は？」

「カバンもノートも、全部放り出して、家出したの」

「お金は、持ってるんでしょ」

「持ってる、と思う」

「じゃあ、大丈夫だわ、だって子供じゃないもの」

八重は、元アナウンサーらしく、やわらかい落着いた声で言った。

「子供よ、まだ」

「高校三年が、どうして子供なのよ。光夫君は母親のあなたより二十センチも背が高いのよ」

「そっちへ行ったら、電話して」

「取材で出てるんじゃないの」

「松井君は社にいるから、彼に言ってくれればいい」

希代子は、今年入ったばかりの後輩の名を言う。アメリカの新しい文学にはやけに

詳しいが、トルストイもトーマス・マンもほとんど読んでいない新入社員だ。希代子にだけは一目置いていて、ときどきホカホカ弁当を買ってきてくれたりする。

「家にお帰りなさいって、言えばいいのね」

「とりあえずはそう言って」

「じゃあ、とりあえずそう言うけど、でも、どうしたの」

「今夜、あいてる？」

会議が始まるまで、あと二分。片方の手で、書類を掴んで立ち上がる。

「九時なら、体があくと思う」

「じゃあ、九時にペガスで待ってる、必ず来てよ、そのとき話すから。ともかく光夫が電話してきたら、家に帰るように言ってよね」

希代子は、受話器を置くやいなや、走り出した。二百人以上の人間が、机についたり電話に出たり足早に歩いている大部屋の中で、希代子の慌てぶりに関心を示す者などいない。文化部に隣接した社会部では、二台の電話が一分も前から鳴り続けているのに、誰も出ようとししないのだ。

「電話よ、電話」

傍らを駆け抜けるとき、一人だけいる女の子に言った。彼女は懽然として手を伸ばし、受話器を耳にあててそれを指さしながら、イ・ヤ・ガ・ラ・セ、と唇の恰好だけで説明した。

だからといって、永遠に電話に出ないわけにはいかないではないか。

会議室に走りながら、希代子は無性に腹立たしかった。社会部の女の子に八ッ当りするつもりはなかったが、つい、鋭い声をかけてしまった。大学を出て入ってきたばかりの彼女から見れば、自分など、小うるさい中年女でしかないのだろう。四十のバアさん、と思っているかもしれない。

四十歳。

会議室の扉を開けると、希代子は胸苦しくなって深呼吸をした。

会議室には午前の陽光が斜めに射しこみ、長いテーブルの上は、ブラインドによって細長く刻まれた光と影に染めぬかれている。

何年か前まではこういうとき、光条を縫うように煙草のけむりが漂っていたものだが、いまは灰皿さえ見当らない。

「お待たせしました」

文化部長の下田以下、既に席について、それぞれ他社の朝刊に目をあてていた。希代子の声で、皆は一斉にそれを折り畳み、顔を上げた。

午後の取材は、国立博物館誘致運動に関するものだった。

ここF市も、他の地方都市同様古代史ブームで、近年、様々な遺跡が発掘されつつある。それに合わせて、国立の博物館を、という地元の声も高まり、新聞社としても応援するかたちになった。

今日はそうした一連の運動に関わっている人たちを二人、インタビューした。その足で、最近児童文学で大きい賞をとった作家を訪ねた。カメラマンが待ち合わせ時間を間違えたため、約束より三十分も遅れてしまった。

社に帰りついたのは七時過ぎで、文化部の者は誰もいない。机の上には二枚のメモがあり、一枚は妹の和歌子からの電話で、伝言として「週末は顔を見せて下さい」とある。

六歳違いのこの妹は、希代子とまるで逆の性格に生れついたらしく、見知らぬ人間と会うのが嫌いときている。新聞社どころか、顔を合わす人間が限られている法律事

務所だって半年で辞めてしまった。結婚して七年にもなるのに子供に恵まれず、いまはもうすっかり諦めてしまったが、そのぶん姉の希代子への依存が強くなった。夫の耕介が全世界への窓口のような毎日だが、近ごろは耕介があまりかまってやらなくなったのか、希代子にばかり電話をかけてくる。何かお稽古事でも始めたら、と勧めるのだが、「知らない人と話すと疲れるの」と言っただけで家から出ようとしなかった。光夫の行先として、真先に和歌子のところを想像するべきだろうが、息子の性格を知っているもので、それは考えにくかった。和歌子の前で愚痴や不満を口にすれば、彼女の心中は何倍もの嵐となり、やがて心配のあまり病気になりかねないのだ。

行くとすればやはり、八重のところだろう、とまた、光夫のことを考えた。光夫は、東京の放送局で働いていたころの八重をよく覚えていて、美人だね、などと言ったものだ。いまはすっかりブラウン管から遠ざかったが、八重は数年前まで朝のニュース番組のアシスタントをやっていて、「あの人が母さんと同じ年なんて信じられねえや」などと言っただけで、希代子を怒らせていた。地味な存在だったので、ブラウン管から消えたのも目立たなかった。

もう一枚のメモは、その八重からで、「光夫君から電話アリ。心配しないで。九時

にペガスで待つ」とあった。家に電話を入れてみたが光夫は帰っておらず、マンションの玄関脇に置いてある電話機が、虚しく鳴り続けている。

「新しいムール貝が入ってますけど、食べてみませんか」

冷蔵庫からサラダ菜やクレソンを取り出しながら、サトルが声をかけてきた。希代子はビールをあおった口で大きく溜息をつきながら、店内を見まわした。

「熊ちゃんは、どこへ行ったの」

「いつもの散歩です」

「エプロンつけたまま？」

「ええ、彼、エプロン似合うでしょう？」

「そうね、サトル君も熊ちゃんも、似合うんじゃないかな。さっきのムール貝ね、食べてみようかしら」

「お刺身で、どうですか」

「だって、ムール貝でしょ」

「本当に新しいやつでないと、駄目ですけどね。自分で真似したら腹をこわしますか

ら

希代子はこれまで、仕事柄けっこう飲む機会も多く、この種の酒と料理を出す店もいくつか知っているが、このペガスを一番気に入っていた。

最初に来たのは一年ばかり前だったが、おや、と新しい感覚に打たれた。店の内装やカウンターは、どこにでもある感じで、別段目新しくもない。カウンターのの上には小ぎれいな大皿に地中海料理のいくつかが置かれているのも、背後の壁に何十種類もの酒瓶が並べてあるのも、炉端焼きの洋風版といったところで、別に驚きもなかった。

新しい、と感じたのは、カウンターの中で働く二人の男を見たときだ。黒いエプロンが似合う体を忙しげに動かしながら、女ばかりがずらりと並んだカウンターの相手をしていたが、いかにもよく気がつく弟、といった感じで、女の酔客の相手がうまかった。

仕事を終えたあと一杯飲みながら食べる、という感じの女がほとんどで、その客たちの飲みっぷり食べっぷりとカウンター内の二人の男を見ていたとき、希代子は、世の中変わったな、と実感したものだ。

二十年近く、新聞社という男社会で働いてきた希代子にとって、酒を飲む場所での女の変化には、複雑な思いがある。十年前は、こういう場所にさえ、男とカップルでないに入りづらかった。いまは逆で、男が一人でぶらりと入ってきて、何かに圧倒されたようにすごすごと出ていく。いつだったかタクシーの中から散歩中の熊ちゃんを見かけたが、彼は煙草を口にくわえ、エプロンに両手をつっこみ、少し暗い表情で歩いていた。その横顔にはそろそろ四十という男の疲れが滲み出ている、声をかけそびれてしまった。

ムール貝の刺身が出てきた。

「待たせたかしら」

八重が頬を紅くして入ってきた。冷えこんできたようだ。

八重はいつもカンパリソーダを飲む。彼女の色白の肌には、その赤はよく似合った。「光夫君から電話があつたわよ、希代子の電話が切れてすぐ。派手にぶつかったみたいね」

栗毛のショートヘアーの髪の毛数本だけが真紅に光った。照明の加減で、緑色に見えたりする。頬と顎がいくらかたるんだ以外、二十歳のころとほとんど変化がない。